

『野ざらし紀行』跋文への疑義

井 上 敏 幸

Doubts about the epilogue of Nozarashi kiko

Toshiyuki INOUE

(昭和四十七年十二月四日受理)

はじめに

芭蕉の『野ざらし紀行』に添えられた素堂の序文(長文型)・跋文(短文型)をめぐる問題点は、次の二点に集約される。

その一は、序文・跋文がともに素堂の手になるものであったかどうかであり、その二は、序文・跋文の推敲過程とそれぞれの執筆年次をめぐるものである。

一については、両者ともに素堂の手になる、そしてそれは短文の跋から長文の序の順序で推敲されたとする説が圧倒的であり、序文偽作説を提出されたのは志田義秀博士一人であった^{註1}。両者を素堂作とする説の中では、その推敲過程を(イ)跋文↓序文とする説と、(ロ)序文↓跋文とする説とに分かれる。現在では(イ)跋文↓序文説がほぼ定説化している^{註2}と、いってよいが、(ロ)の序文↓跋文説をとられたのは、一人荻野清氏であった^{註3}。

私の疑義は、現在定説化している(イ)跋文↓序文推敲過程説への素朴な疑問に発する。長文の序は、『野ざらし紀行』の句一つ一つを賞讃する文が、むしろ単純に並列された形で長くなったものであり、それに対し短い跋文は、句句の賞讃の部分を極力省き、逆に『野ざらし』の旅出発当時の友人達の芭蕉への心遣いを中心とした文章を冒頭に付加する形

で、全体として短文化されたものである。この両者を虚心に読んだ場合、長文から短文への推敲過程を考えるのはきわめて自然なことであろう。そして、序文↓跋文の推敲過程を仮定した場合、跋文の冒頭部に付加された友人達への配慮は、素堂のそれであるとするより、ほかならぬ『野ざらし紀行』の作者芭蕉自身の配慮ではなかったかという疑問が生じるのも、また自然なことではなからうか。

志田義秀博士は、序文は「内容から見て、前者(跋文)^{註4}に誰かが手を加へて改作したものではないか」^{註5}。とされ、跋文は「真物」^{註6}。とされたが、私は逆に、序文は素堂の手になる「真物」であって、跋文は芭蕉の手の加わったものではないかという仮説を提出してみたい。そしてこのことは、自ら序文(素堂)・跋文(芭蕉)の執筆年次の推定へも及ぶことになろう^{註7}。

一

まず、長文の序と短文の跋とを比較してみる。両者ともに三段構成をとると考えられるので、両者を三段に分け、順次検討していくことにする。

序(初段)

跋(初段)

A	我友はせを老人	A'	こがねは人の求めなれど、求むれば心静ならず。色は人のこのむ物から、このめば身をあやまつ。ただ、心の友とかなり
B	ふるさとのささき	A'	なぐさむよりたのしきはなし。こゝに隠士あり、其名を芭蕉

行脚の心つきて、	とよぶ。はせをはをのれをしるの友にして、十暑市中に風月	
それの秋江上の庵	をかたり、三瀬江上の幽居を訪ふ。いにし秋のころ、ふるさ	
C	を出、またの年の	とよぶ。はせをはをのれをしるの友にして、十暑市中に風月

さ月待ころに帰られを送り、猶律をとふ人もありけり。

ぬ。見れば先頭陀

何となく芝ふく風も哀なり

杉風

のふくろをたゞく。

他はもらしつ。此句秋なるや冬なるや、作者もしらず、唯お

たゞけはひとつの

もふ事のふかきならん。予も又朝がほのあした、夕露のゆふ

たま物を得たり。

べまたずしもあらず。霜結び雪とくれて、年もうつりぬ。い

つか花に茶の羽織見ん、閑人の市なさん物を、林間の小車久

してきたらずと温公の心をおもひ出し、やゝ五月待ころに帰

りぬ。かへれば先吟行のふくろをたゞく。たゞけは一つのだ

まものを得たり。

この初段は、序の短い文章が、跋においてはおよそ序の四倍の量にふくれあがっている。序の文章は、『野ざらし紀行』を読んだ序文の筆者と芭蕉との一対一の人間関係のみを考慮して書かれたものであり、筆者はつとめて客観的立場から、芭蕉の「野ざらし」の旅の出発と帰庵の様子を説明している。これに対し、跋文の執筆態度は、跋文の筆者（素堂を装った芭蕉ということになるのだが）との関係、また友人達との関係をも考慮したものとなっている。これは一対一の人間関係を越えた、素堂を含めた複数の人間と芭蕉との関係から発想された文章であり、しかもその人間関係自体が客観視されていることが注目される。序文↓跋文の推敲が同一人ではあるまいとの直観的疑問が生まれる所以である。以下、両者の詳細な検討をこゝろみることにする。

冒頭のA「我友はせを老人」の七字が、跋文ではA「こゝに隠士あり、其名を芭蕉とよぶ。ばせをはをのれをしるの友」を中心としたAのおよそ一二〇字に拡大されている。序文のA「我友はせを老人」は、筆者と芭蕉の一対一の関係そのものであり、これは筆者の芭蕉への直接的呼びかけだと解してよい。これに対し、跋文のA「ばせをはをのれをしるの友にして、十暑市中に風月をかたり、三霜江上の幽居を訪ふ」は、

素堂と芭蕉との交遊関係の客観的説明であり、さらにAの「こがねは人の求め云々」から「ただ、心の友とかたりなぐさむよりたのしきはなし」までの冒頭部は、両者の交遊関係を飾るための修辭的な序に相当するものだと解される。またこの「ただ、心の友とかたりなぐさむよりたのしきはなし」の一文は、この跋文の執筆態度が、素堂と芭蕉の隠士的交遊関係を第三者に伝えようとする態度によるものであることが察知される。

跋文に挿入された「十暑市中に風月をかたり、三霜江上に幽居を訪ふ」の一文も、素堂ではなく改稿者が芭蕉であったとすれば、「十暑」
「三霜」の年数計算が芭蕉の発想であることが明確になり、跋文の執筆年次も確実性を加えることになるが、このことは後に改めて検討することにする。

次に、序文のB「ふるさとのふるきをたづねむついでに、行脚の心つきて、その秋江上の庵を出」と、跋文のB「いにし秋のころ、ふるさとのふるきをたづねんとて草庵を出」とについてであるが、これも跋文が芭蕉の手にかかるものであるとすれば、序文の「ついでに、行脚の心つきて」という素堂の事実そのままの書きぶりに対し、この部分を殊更に削除した芭蕉の心理は一考に価しよう。従来も注目されている「それの秋」と「いにし秋」との相違は、勿論両者の執筆年次を伺わせるものであるが、このことについても後に検討することにする。

続いて、序文のC「またの年のさ月待ころに帰りぬ云々」と跋文のC「やゝ五月待ころに帰りぬ云々」およびこの一文に関連したCの部分とを比較してみる。

Cの「またの年のさ月待ころに帰りぬ」と、Cの「予も又朝がほの云々」から「やゝ五月待ころに帰りぬ」までとを比べてみると、Cの「またの年」が、Cでは「予も又朝がほのあした、夕露のゆふべまたずしもあらず。霜結び雪とくれて、年もうつりぬ」の如くに長文化されている。また、Cでは、次の「いつか茶に」以下「温公の心云々」までが新

たに挿入されたことになるが、この「いつか花に茶の羽織見ん」は、貞享二年夏序刊の『一樓賦』に載る素堂の発句「蕉桃青たびに有をおもふ いつか花に茶の羽織櫛木笠みん」^註。によったものであった。続く「閑人の市なさん物を」は、かつて素堂がたはむれに芭蕉にいった言葉であったようである。素堂は、元禄五年の『三日月日記』序に、「月にふたり隠者の市をなさんと、みつから申つることくさも古めきて、入くる人々にも、句をすゝむる変になりぬ」^註と述べている。「隠者の市をなさん」と「閑人の市をなさん」とは全く同想である。また、「石川丈山翁の六物になそらへて芭蕉庵六物の記」の其五「画菊」中に「此ふた草（菊と水仙）の百草におくれて霜にほころぐとく友あまたある中にひさしくあひかたらはんとたはぶれ菊の絵をはなして贈る」^註といった言葉がある。「友あまたある中にひさしくあひかたらはん」は、私とあなただは、菊と水仙の如く他にさまたげられることなく、静かに久しく語りあおうというのであり、「隠者（閑人）の市をなさん」と類似したものを想像させる。ただ、『三日月日記』序の「古めきて」が、どれほどの年月をいうのかわからないが、「芭蕉庵六物の記」の其六「茶羽織」が「野ざらし」の旅の折の物であること、また其四の「檜笠」が貞享四年冬、其二の「大瓢」が貞享三年仲秋頃であることを考えると、貞享年中と考えると大過なさそうである。今は「いつか花に茶の羽織」と同時期のものと想像しておく。とすれば、旅中に素堂が詠んだ句や素堂がその前後に言った言葉を、旅中の芭蕉の心境として叙述したのは、素堂ではなく、素堂に対する挨拶を籠めた芭蕉の仕業であったと解して始めてこの部分が了解されるのではあるまいか。素堂とした場合は、芭蕉に対する自分の押しつけであり、潜越な行為となってしまうからである。そしてこの「閑人の市をなさん」の会話は、跋文のAに付加された「ただ、心の友とかたりなくさむよりのしきはなし」を、具体的に再述したものであって、素堂に対する挨拶の表現がより明確になってくると解される。跋文の筆者は、少くとも素堂ではありえないであろう。

次に、序文になく、跋文において新たに加えられた部分を見てみると、杉風の句を中心とした句文、

したしきかぎりは、これを送り、猶律をとふ人もありけり

何となく芝ふく風も哀なり 杉風

他はもらしつ。此句秋なるや、冬なるや、

作者もしらず、唯おもふ事のふかきならん。

を、素堂が書き加えなければならない心然性はどこにもあるまい。ことさら、杉風の句を掲げ、「他はもらしつ」と素堂が書かねばならない理由は考えられないであろう。これが、芭蕉のパトロンの存在であった杉風に対する、芭蕉の心遣いであったことは今更説くまでもない。

また、「したしきかぎりは、これを送り、猶律をとふ人もありけり」の一文は、『笈の小文』の「旧友新疎門人等、あるいは詩歌文章をもて訪ひ、或は草鞋の料を包て志を見す。（中略）あるは小舟をうかべ、別墅にまうけし、草庵に酒肴携来りて行衛を祝し、名残をしみなどする」や、『おくのほそ道』の「むつまじきかぎりには背よりつどひて、舟にて送る。（中略）人々は途中に立ならびて、後かげのみゆる迄はと見送るなるべし」の如き、旅立ちにおける離別の場面の原形が、既にここに示されていると考えてよいであろう。

跋文の初段には、およそ以上の如き諸点に、跋文芭蕉改稿説の根拠が考えられるのである。

二

さて、序文・跋文ともに文章の中核をなすのは第二段である。殊に序文の場合は、この第二段が全体の八割以上を占めており、序文が素堂の『野ざらし紀行』評釈的性格を規定することになっている。これに対し、跋文の第二段は、序文のおよそ三分の一の量に削減されており、跋文全体に占める量も五割前後にとどまっている。

長い引用になるので、序文は跋文に應ずる部分のみを掲出する。

序 (第二段)

①そも野ざらしの風ハ出たつあしも
とに千里のおもひをいだくや、きく
ひとさへそゞろ寒げ也。

③富士川の捨子ハ側隠の心を見えけ
る。かゝるはやき瀬を枕としてすて
置けん、さすがに流よとハおもハざ
らまし。身にかふる物ぞなかりき。
みどり子はやらんかたなくかなしけ
れど、むかしの人のすて心までも
ひよせてあはれならずや。

④又さよの中山の馬上の吟、茶の烟
の朝げしき、麓に夢をおびて、葉の
落る時驚きけん詩人の心をつつせ
るや。

⑧それより古郷に至りて、はらから
の守袋より、たちねの白髪を出し
て拝ませけるハ、まことあはれさハ
其身にせまりて、他にいはゞあさか
るべし。

⑩またとく／＼の水にのぞみて、波
にちりもなからましを、こゝろ見に
すゞげん。此翁年ごろ山家集をし
たひて、をのづから粉骨のさも似た
るをもつて、とりわき心とまりぬ。
おもふに伯牙の琴の音、こゝろざし
高山にあれば、峨々ときこへ、こゝ
ろざし流水にあるときハ流るゝごと
しとかや。我に鐘子期がみみなしと
いへども、翁のとく／＼の句をきけ
ば、眼前岩間を伝ふしたゝりを見る
がごとし。

⑮同じくふもの坊にやどりて坊が

跋 (第二段)

そも野ざらしの風は一步百里のお
もひをいだくや。

富士川の捨子は其親にあらずして
天をなくや。なく子は独りなるを往
来いくばく人の仁の端をかみる。猿
を聞人に一等の悲しみをくはへて今
猶三声のなみだ下りぬ。

次にさよの中山の夢は千歳の杜牧
とゞまれる哉。西行の命こゝにあら
ん。

猶ふるさとのあはれは身にせまり
て、他にいはばあさからん。

誠や伯牙のこゝろざし流水にあれ
ば、其曲流るゝがごとしと、我に鐘
期^註が耳なしといへども、翁の心
とくとくの水をつつせば、句もまた
とく／＼としたゝる。

翁の心、きぬたにあれば、うたぬ

妻に砧をこのミけん。むかし、潯陽
の江のはとりにて楽天をなかしむる
ハ、あき人の妻のしらべならずや。
坊が妻の砧は、いかに打て翁をなぐ
さめしぞや。ともにきかまほしけ
れ。それハ江のはとり、これハふも
との坊、地をかふるとき又しから
ん。

美濃や尾張や大津や、⑮から崎の
松、⑩ふし見の桃、②狂句こがらし
の竹斎、よく鼓うつて人のこころを
まなバしむ。こと葉皆蘭とかうばし
く、やまぶきと清し。静かなるおも
ひ、ふきハ秋しべの花に似たり。そ
の牡丹ならざるハ、隠士の句なれば
也。

砧のひゞきを伝ふ。昔白氏をなかせ
しは茶壳が妻のしらべならずや。坊
が妻の砧は、いかに打てなぐさめし
ぞや。それは江のはとり、これはふ
もとの坊、地をかゆともまたしから
ん。

美濃や尾張のやいせのや、狂句木
枯の竹斎、よく鼓うつて人の心を舞
しむ。其吟を聞て其さかひに坐する
に同じ。詞皆蘭とかうばし、山吹
と清し。しづかなる趣は秋しべの花
に似たり。其牡丹ならざるは隠士の
句なれば也。

(註、序文に付した番号は、序文に引用された『野ざらし紀行』中の発句の
順序を示す。番号が飛んでいるのは、跋文でその番号の部分が省略された
ことを示す。)

序文では『野ざらし紀行』の発句二〇句にわたっての論評が見られる
のであるが、跋文ではそれが七句にとどまっている。しかも、序文の論
評の核心をなす「梅白し」「すみれ」「むくげ」の句についての部分が
一切削除されている。序文・跋文がともに素堂の手になるとした場合、
二〇句のうちから七句を選びだす時、これらの三句を除くとはまず考え
られない。それらは『野ざらし紀行』を読んだ時の素堂の感動の中心で
あり、序文全体の中核をなすものだったからである。

序文の⑧に続く、

しばらく故園にとゞまりて、大和廻りすとて、わたゆみを琵琶になぐ
さみ、竹四五本の嵐かなと隠家によせける。此両句をとりわけ世人も
てはやしけるとなり。しかれ共、山路きてのすみれ、道ばたのむくげ

こそ、此吟行の秀逸なるべけれ。

および⑩の次の、

洛陽に至り三井氏秋風子の梅林をたづね、きのふや鶴をぬすまれしと、西湖にすむ人の鶴を子とし梅を妻とせしことをおもひよせしこそ、すみれ・むくげの句のしもにたゝんことかたかるべし。

といった、世人および素堂の賞讃(素堂にとつての賞讃は、素直な感動の表現であり、序文を草することの目的でもあったはずであるが)を、一切削除しうるのは、跋文の作者がほかならぬ芭蕉であったからと解するのが、理にかなった解釈なのではなからうか。

さて、序文・跋文がともにとりあげている句について、順次検討していくことにする。

冒頭①「野ざらし」の句の部分の、千里(序文)↓百里(跋文)への改稿は、紀行本文冒頭「千里に旅立て」との重複をさけるための措置であったと思われる。「きく人さへそぞろ寒げ也」(序文)の削除も同じ理由からであろう。

次に③「富士川」の項であるが、序文の評論の中心は、「むかしの人のすて心までもおもひよせてあはれならずや」にある。そして、この文章で素堂がいたかったのは、尾形昉氏が述べられた如く、「捨て子の親の心を、愛を捨て子を捨て、法の道に投じた古人の道心に思い寄せたものではあるが、それはまた、社会的無力さの自覚の上に隠遁風流の道を歩む芭蕉の心を思い寄せたもの」^{註12}であった。つまり、素堂は作品としての富士川の条を通り越して、むしろ直接的に、その場における作者芭蕉の心情を推測しているのである。ところが、跋文におけるこの一条の視点は、全く次元を異にし、「猿を聞人すて子に秋の風いかに」一句の創作心理を解きあかすところに眼目が置かれている。この視点の相違を看過するわけにはいかない。

「猿を聞人に一等の悲しみをくはへて」作られたこの発句を読むと、今も読むたびごとに三声の涙を禁じえないというのである。いうまでも

なく、杜甫の詩句「猿ヲ聴キテ実ニ下ル三声ノ涙」^{註13}を下敷にした文章だが、芭蕉は、この杜甫の悲しみに、捨て子の泣き声と呼び起す自己の実験体験に基づくなまの悲しみを加えてこの句を作ったのだと、ここで自句自解をこころみていたのである。こうした、古人の作品に自己の実験体験に基づく感動を付加した形で創作する方法を、芭蕉は後年「一段すり上て作すべし」(『去来抄』)・「一段せめ上て可作」(『随門記』)等と述べているが、跋文が芭蕉の手にかかるとすれば、この「猿を聞人に一等の悲しみをくはへて」の一文は、そうした創作手法の最初のあらわれであったということになるのではなからうか。後年の芭蕉の創作手法を思わせる、跋文のこの一節は、芭蕉自身の手によってこそ可能な記述ではなかったか。^{註14}

次に序文④の「馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり」における叙述を、全く異ったものとした理由も『野ざらし紀行』本文との重複をさけるためのものであったと想像される。

馬上に鞭をたれて、数里いまだ鶏鳴ならず。

杜牧が早行の残夢、小夜の中山に至りて忽驚。

の紀行本文に対して、

さよの中山の馬上の吟、茶の烟の朝げしき、麓に夢をおびて、葉の落る時驚きけん詩人の心をうつせるや

は、同じ語句による単なる繰返しに過ぎないからである。

ところで、序文偽作説を提出された志田博士の論拠は、この第二段における紀行本文の語句や発句の杜撰な、あるいは誤りを犯した引用にあった。志田博士は、序の「道ばたのむくげ」について「『道のべの木樫は馬に喰はれけり』の句が素堂生前の時期に於ける何かに『道ばたの』になってゐるものが果してあるかどうか、或は又『野ざらし紀行』に直接する関係を持つ此の文に於て素堂が『道ばたの』の如く誤るといふ事があり得る事かどうか。かう考へて来ると、これだけでもこの文が疑問を持たされるものになって来るのである」^{註15}と述べ、さらに「『いづれ

の浦」とか「笠着てぞうり」とかいふ杜撰があつて、斯る杜撰は素堂とは思われない^註とされた。確かに「道のべの」を「道はたの」と書き、「笠着て草鞋」を「笠着てぞうり」としたのは杜撰であり、「年暮ぬ笠きて草鞋はきながら」の句が詠まれた所を「いづれの浦」にてかとしたのは誤りである。しかし、以上のような『野ざらし紀行』本文の杜撰な引用や誤りが、ただちに序文偽作説の根拠となりうるであろうか。偽作であればある程、本文引用には慎重を期すのが偽作の一般的心理なのではないかとの反論もできるからである。そこで、以下素堂の他の文章における先行作品引用の態度を徴してみることとする。

元禄三年、「九月十三夜游园中十三章」の「其十二 寄芭蕉翁」の中に、「さらしな月より帰りて」「木曾の瘦もまたなほらぬに」など詠しけらし^註と芭蕉句を引用しているが、「木曾の瘦も」といふ形になつたのは、元禄八年刊の『笈日記』以降であつて、梅人刊、杉風本『更科紀行』および『木曾の谿』所収本には「も」はない。素堂が引用した句は、その時点からいって、杉風本の「木瘦の瘦まだ直らぬに十三夜」の初案形に違いなく、これは明らかに素堂の杜撰である。

芭蕉以外の作品引用においても、『新撰菟玖波集』所収の宗長の付句「むかしせし思ひをさよのね覚にて」を、「枕にて」(貞享五年九月十日、「十日菊」句文^註)と誤り、同じく『新撰菟玖波集』所収の宗祇の句「世にふるもさらにしぐれのやどりかな」^註の中七を「おなじ時雨」(「石川丈山翁の六物になぞらへて芭蕉庵六物の記」其四「檜笠」)と誤っている。また、長嘯子の歌を引用しては、「世々のひとの月はながめしかたみぞとおもへば」物ぞかなしき(刊本『挙白集』卷四^註)の歌の下七を「ぬる袖哉」(和歌「世をわたる身のほどく」に^註)の詞書^註と誤っている。

『枯尾花』所収の芭蕉追悼句「旅の旅」の句の前書で「深草のおきな宗祇居士を讃してはいはずや、友^註風月、家^註旅泊^註云々^註」と元政の詩句を引用しているが、元政の詩句は「旅・泊・生・涯・風・月・身」「風・月・是

生涯^註」というのであつて、これは素堂の記憶にそつた創作だつたといつてよい。今一つ例をとると、当時世に喧伝された蟻道の句「弥兵衛としりても哀れはち扣」(柏原集)を、蟻道追悼集で素堂は「茂兵衛ぞとしりつゝあはれ鉢扣」と書いた上で、「今きけば五文字弥兵衛なるよし。されとも東武にてひとのよろこひしは茂へいにて侍ればいま改るに忍びず」^註と書いている(ちなみに其角は「弥兵衛とはしりても哀れ」(句兄弟)と記す)。

以上の如き素堂の引用態度は、ことに蟻道の句の場合に明らかになうに、彼が文章を草するにあつて原典を見直すような人ではなく、ファーストインスピレーションによつて作品を引用する人であつたと考えてよさそうである。とすれば、『野ざらし紀行』を読んで感動した素堂は、その感動のままに一気に序文を草した結果、志田博士の指摘された如き杜撰・誤りを犯したのだということにならう。素堂のこうした引用態度が明らかになれば、杜撰・誤りのあることが、逆に素堂の作であることの証明になるといつてもよいのではなからうか。志田博士の指摘以外に「山田が原の神杉をいだき」は「みそか月なし千とせの杉を抱あらし」の明らかな解釈の誤りだが、この誤りもまた、そうした素堂の性癖のあらわれだつたと解される。

以上、序文・跋文第二段の検討によつて、跋文に芭蕉の手が加わっているのではないかという疑問は、更に確かなものとなつてくるのではなからうか。

三

第一章、第二章では、序文・跋文の文章内容の直接的比較のみに終始したが、ここでは第三段における序文・跋文の語彙・文体の特徴を検討した上で、序文・跋文全体にわたる文体的相違をさぐり、跋文芭蕉改稿説を補つておくことにする。

序 (第三段)

風のはせを、霜の荷葉やぶれに近し。しばらくもとどまるものゝ形見草にも、よしなし草にも、ならぬべきのみにして書ぬ。

跋 (第三段)

風の芭蕉、我荷葉ともにやぶれに近し。しばらくもとどまるものゝ形見草にも、よしなし草にも、ならぬべきのみにして書ぬ。

序文・跋文の第三段における問題とすべき文章上の相違は、傍点をほどこした二つの部分である。

まず第一点は、文章の結びの相違「の・ミ・の・ミにして書ぬ」(序文)と「の・みにして書ぬ」(跋文)とである。序文における「の・み」の繰返しは、延宝末年から貞享年中にかけての、寓言説に基づく「鼓舞」表現の残滓であった。この時期の鼓舞表現は、もっぱらはなやかさを求めた表現であって、蕉門の人々においてそれはことに著しいものがあつた。^註たとえば、嵐雪の『田舎の句合』序(延宝八)の結び、

あゝ千里同腹中なる事を知ル。しるといへば、我是をしるに似たり。しらずして後に筆をとる。又是しらざるなり。

における「知る」の一語の繰返しである。

素堂の場合も「草堂建立之序」(天和三)の一節

清貧とせんや。はた狂貧とせんや。翁みつからいふ。たゞ貧也と。貧のまた貧、許子の貧、それすら一瓢一軒のもとめ有。

における「貧」の一字の繰返し、また「続の原句合判跋」(貞享四)の結びの部分における

我判にかゝはらじとすれど、人又云ん、無判の判も判ならずやと。

の如き「判」の繰返しがそれである。すでに述べた如く、こうした鼓舞表現は、芭蕉をも含めて、延宝から貞享にかけては殊に著しいものがあった。序における素堂の「の・み」の繰返しは、こうした意識のあらわれだったと断じてよいであろう。

ところで、芭蕉における鼓舞表現は、貞享四年を境としてはなやかな奇警な表現から、その思想の内面化と軌を一にした形で、重厚なリズムをもった沈潜した内的表現に変わっていくのである。そうした表現法の変化を考慮した場合、序文における「の・みのみ」の繰返しは跋文において「の・み」の一語にとどめられたことは注目されねばならない。つまり、当時の文章法の変化から考えた場合、第一に序文・跋文の推敲は、序文の「の・みのみ」から跋文の「の・み」へと改稿されたのであって、跋文から序文への改稿は考えられないということである。そして、第二には、序文から跋文への改稿を行った者は、折しも従来の鼓舞表現への反省期にあつた芭蕉がもっともふさわしいということになるのではなからうか。

次に相違点の第二、序文の「霜の荷葉」から跋文の「我荷葉」への改稿についてだが、広田二郎氏は跋文を初稿とされ、「我荷葉ともにやぶれに近し」とあるのによつて、素堂がまだ上野不忍池畔にあつた頃この稿を草しはじめたことがわかる^註と述べられた。だが、「我荷葉」とあることが直ちに不忍池畔在住の根拠となりうるであろうか。貞享五年九月(素堂の葛飾移居は貞享二年夏以降貞享四年冬の間と推定されている^註)の「十日菊」の宴の折、芭蕉は文章を草して、冒頭に「蓮池の主翁」と呼んでいる。考えてみれば、序文の文章は「蓮」を素堂の号として、「芭蕉」との対で用いられたものであって、居住地がどこであつたということとは、この場合関係ないことであつたと解してよいのである。

それにしても、「我荷葉」とは素堂の改稿を思わせる措辞であるが、芭蕉の側に立つて考えてみると、これには出典ともいふべきものがあった。先に『一楼賦』の「いつか花に」の句について触れたが、『一楼賦』所収の素堂の句に「吾荷葉梅に鳥のやとり哉」というのがある。芭蕉は「山素堂」の跋文たらしめるべく、序文の「風のはせを、霜の荷葉」の対句表現を崩してまで、わざわざこの句の上五「吾荷葉」の三字を書き

つけたものと思われる。

以上のように検討を加えた場合、序文が執筆されたのは移住後の「かつしか」であったと見てよく（序文における『野ざらし紀行』の発句の引用から見ても、素堂が読んだのは『野ざらし紀行』第二稿以後のものであったことから）、貞享二年夏以降ということになるが、このことは後に触れる）、従って、跋文の改稿時期も、少くとも貞享二年夏以降ということになってくる。

さて、ここで序文と跋文の文体的特徴を全体的に比較した場合、その最も顕著な相違を、私は四字句^註の有無に見る。

四字句とは、跋文の初段に挿入された「十暑市中に風月をかり、三霜江上の幽居を訪ふ」の、「十暑市中」「三霜江上」をいう。跋文には、第二段にも「一歩百里のおもひ」の如き四字句を指摘することができ。勿論、素堂も四字句を用いているのであるが、芭蕉が四字句にかけた意識とはおのずから質を異にするものであった。現に素堂は、序文の中で一ヶ所「天然二寸の魚といひけん」と四字句を用いている。しかしこれは、杜甫の詩句「天然二寸魚」（杜詩集註・五言律・食物類）そのままの引用であって、むしろこれは、漢詩の知識を誇示した引用なのであった。^註これに対し、跋文における四字句は、「十暑市中」「三霜江上」が、素堂と芭蕉の交友関係の期日と場所を確定する資料として常に問題とされる如く、それらは単なる文飾ではなく、文脈そのものを支える執筆者芭蕉の意思にみ込まれた字句だったのである。

ちなみに、貞享四年秋に草された素堂の「蓼虫説」の推敲過程と、芭蕉の「蓼虫説跋」のそれとを比較してみると、素堂の説には、四字句は一度も頭を出さないものであるが、芭蕉の説跋における推敲は、主に四字句の推敲であったといつて過言ではない。

蓼虫草稿

つら／＼見れば、離騷のたくみ有に

蓼虫説跋真蹟

つら／＼みれば、離騷のたくみ有に

似たり。又、蘇・新・黄・奇・有。初に舜の孝なるをいへるは、人におしへをとれと也。其無能を感じる事は、ふたゝび南花の心を見よと也。かたちのすこしきなるを憐むは、足事をしらしむ。呂・房・子・陵がむかしをひきて、隱逸の用意を告るか。玉虫のたはぶれば、色をいさめんとらし。

ゝたり。又、蘇・新・黄・奇・あり。はじめに虞・舜・曾・参の孝をいへるは、人におしへをとれと也。其無能不才を感じる事は、ふたゝび南花の心を見よとなり。終に玉むしのたはれば、色をいさめむとならし。

草稿は、素堂の「蓼虫説」を読んだ感動をそのままなざる形で、「初に舜の孝」、「其無能を感じる」、「かたちのすこしきなる」、「呂・房・子・陵がむかし」、「玉虫のたはぶれば」と、個条書的につらねたものであったが、真蹟では「はじめに」「終に」の一文脈の中に、三ヶ条がとりこまれている。この二ヶ条の省略の態度と、並列的であったものを一文脈の中にとりこんでいく態度とは、『野ざらし紀行』序文の長大な個条書的並列を極力おさえ、緊密な文脈の中にとりこんでいくこととする態度（序文における⑭⑯を跋文では「誠に伯牙」の一文となしたこと）と同じであったといつてよい。そして、こうした推敲過程の中で、その中心をなすものが「舜の孝」↓「虞・舜・曾・参の孝」、「其無能を感じる」↓「其無能不才を感じる」といった四字句であったことは、最はや説明をほどこす必要もあるまい。

さらに、こうした四字句による推敲が芭蕉であったことを思わせるものに、濁子の清書した絵巻の奥書がある。「此一巻は必記行の式にもあらず、たゞ山橋野店の風景、一念一動をしるすのみ」における、この四字句の使用は、跋文の四字句による改稿者が、ほかならぬ芭蕉であったことを暗に物語っていると解されるのである。

以上、第一章から第三章にわたって検討したものが、私の跋文芭蕉改

稿説の論拠である。殊に、初段における素堂の句や言葉の引用、また杉風の句を中心とした句文の挿入といった友人達への心遣い、第二段における賞讃の句「梅白し」「すみれ」「むくげ」の部分の削除と後年の芭蕉の発言を思わせる「猿を聞人に一等の悲しみをくはへて」の一文、そして第三章に述べた四字句を中心とした推敲等の諸点は、芭蕉でなければそうした改稿は必然性を持たなかったであろうし、また、芭蕉でなければ決してなしえなかったであろうと考えるのであるがいかがであろうか。

四

ところで、『野ざらし紀行』本文の推敲過程が、菊本本↓泊船本原典↓孤屋本原典↓芭蕉自筆絵巻草稿という四段階を経て、濁子清書本が出来たとする定説^{註30}に疑問をさしはさむ余地はない。ただ一つ疑問なのは、孤屋本の筆写年次がはたして貞享三年だったかどうかである。孤屋本には「寅 六月初旬写之者也 孤屋」という日付があって、『野ざらし紀行』諸本の中で筆写年次の判明するものとして、とりわけ珍重されている。そして、従来の研究では、この「寅」を貞享三年丙寅とし、この年次を踏まえての立論が一般的である。^{註31}したがって、序文・跋文の成立過程についても、孤屋本に付載されているが故に跋文も貞享三年六月までに成立したものであり、序文はその後改稿された（弥吉氏は宝永七年成立説）とされている。一見疑問の余地のない説の如くであるが、この説には、紀行本文と序文あるいは跋文が一続きのものとして推敲されたという前提があったようである。芭蕉自筆絵巻の巻頭に添付された序文が素堂自筆のものであったことは、本来両者が別々に作製されたことを物語っているのである。芭蕉自筆絵巻の写本波静本・潜居写本でも序文が巻頭にあるのは、「何人かが本巻装潢に当って」「巻頭に付した」^{註32}ものをそのまま踏襲したにすぎなかったのである。そしてこの

序文は、本来巻頭に据えるべきものではなく、むしろ後序の意味であって、『野ざらし紀行』の後に付載すべき性格だったはずである。

結論的にいえば、この序文は『野ざらし紀行』の第二あるいは第三稿を読んで書かれたものに違いなく、第二・第三稿成立後に、始めてこの序文は作製されたのであった。定稿の芭蕉自筆絵巻が成った折、素堂自筆の序文は、芭蕉の傍に、一個の作品としてその手許にあったと思われる。そして芭蕉が、『野ざらし紀行』の絵巻を、後序をも含めた形で一続きの巻物として作製するに際し、少しく冗長に、もっぱら芭蕉を賞讃することのみに終始した素堂の序文を、そのまま付載することによりを感じ、芭蕉自らが両者のバランスをとる意味で改稿したものが跋文だったのではなからうか。

これが私の推定なのだが、このような推論が成立するためには、当然第二稿泊船本・第三稿孤屋本に、序文の後に書かれたはずの跋文が、どうして付載されたかが証明されねばならないことになる。そこでまず、従来貞享三年六月といわれている孤屋本の筆写年次についての疑問から検討していくことにする。

孤屋本の奥書には、
一日遊深川之蕉庵而拾得遮莫之一卷而帰即写之旅店之隠下以左右之晨夕之云爾

寅 六月初旬写之者也 孤屋

とあり、この「寅」が従来貞享三年丙寅と解されてきた。しかし、まず不審に思われるのは傍点を付した「拾得遮莫之一卷」の部分である。

貞享三年六月、芭蕉は確かに庵に居た。芭蕉在庵時に、孤屋がこの一巻を借り受けたとして、「拾得」という書きぶりは納得できない。「借覧」とか「拝借」とか記すのが、弟子としての常識ではなからうか。この「拾得」は、芭蕉が庵に居ない時の、それも芭蕉没後の時点での書きぶりなのではなかったか。さらに疑問視されるのは、「遮莫之一卷」の意味である。「遮莫」は聞きなれない熟語だが、辞書では「この上はどう

であろうとまよ。そんなら。よしや」(大漢和辞典)、「サモアラバアレ」(書言字考節用集)と説明されている中国の俗語である。「まよの一巻」「さもあらばあれの一巻」とはどういう意味か。「書捨ての一巻」「捨ててもよい一巻」と解釈すれば、「捨得」とは意味がつながってくる。そこで、一步譲って芭蕉が「書捨てだから」といって孤屋に与えたと解しても、孤屋が「旅店之隠下」でこれを写したという記述には不審が残る。孤屋の詳しい動静を窺う資料のない今、残された発句の詞書や利牛のそれ等によってその動静を推測すると、元禄七年春、「炭俵」の出る直前に二ヶ月程の予定で京へ上ったことがわかる(炭俵)。また、元禄十三年利牛序、同十四年刊『裸麦』には、

孤屋に別るゝ時

牽牛花のつよさを見する別れ哉 利牛

という前書のついた利牛の句があり、これは元禄七年の二ヶ月の別れではなく、江戸を本当に去っていく孤屋を送ったものの如く感じられる。『裸麦』所収の利牛の句には、「芭蕉庵の三廻忌」という前書の句も収められており、元禄九年頃から同十三年にかけての作品を収めたもののようである。とすると、この利牛の孤屋送別吟の成立は、孤屋本奥書の日付を元禄十一年六月と見た場合は、元禄十年秋以前であった可能性も強いのである。

以上の如くに考えれば、「旅店之隠下」に写したという記述も納得できることになるのだが、いかがであろうか。

いま一つの「孤屋本」元禄十一年成立説否定の有力な根拠は、芭蕉没後の芭蕉庵に、そうした真蹟類があった筈はないというのであった。阿部正美氏は「杉風の志によっていくらか旧態を存してはるても、芭蕉が住まなくなつてからの草庵に昔のおもかげはもはやなかったであろう。さういう所へ孤屋が行つて、あまつさへ紀行の一草稿を見つけたということとは考へられない」とされ、「若し見つけたとすれば、杉風にでもことわつて自分のものにすればよく、わざわざ写す必要もあるまい。だから

芭蕉没後の寅年にこの本が成立する可能性はまづないのである」^{註38}と論じられた。

だが、素堂の文章、あるいは梅人が『杉風句集』等に引用した『杉風秘記』なるものを徴すれば、阿部氏とは逆の論もなりたってくる。『冬かつら』所収の素堂の文章によれば、「ことし(元禄十三)かみな月中の二日芭蕉の翁七回忌とて翁の住捨ける庵にむつまじきかきりしたひ入て(中略)、人からのなつかしくて人々句をつらね筆を染て志をあらは」すことになり、自分も志を述べるのだとして七句をつらねている。それらの中の其二・其三は「像にむかひて」と前書したもので、庵には芭蕉像が祭られていたことがわかる。其六には、「形見に残せる葛の葉の絵墨いまたかはかぬかことし」という前書を付して「生であるおもて見せけり葛のしも」^{註39}と詠じている。元禄十三年という時点で、芭蕉庵は以上の如くに健在だったのである。ことに其六の「葛の葉の絵墨」は、現在天理図書館に蔵されている、いわゆる「鯉屋伝来品」中の「葛の葉自画讃」^{註40}に違いなく、これらは杉風の秘藏品として大切に保管されていた筈である。阿部氏とは逆に、訪問者が勝手に持ちだせる状態だったとはどうてい考えられない。

また、芭蕉没後の芭蕉庵についてだが、梅人編『杉風句集』には、『杉風秘記』によるとして「古池や」の句のあとに、
ばせを庵の傍に生洲の魚を囲ひし古池あり。
後元禄十一寅年ばせを庵を外へ引。

春待や根越のばせを雪かこひ 杉風

の如き一節^{註41}を引用している。また、梅人著の『桃青伝』の中でも、「今古池の地ハ松平遠江守殿屋敷となる、其節深川にて代地被下候、愚案元禄十一・二の頃か」^{註42}と述べている。杉風の句の季節を考えれば、芭蕉が住んでいた旧庵が移されたのは、元禄十一年冬だったと考えてよいであろう。とすれば、たまたま芭蕉庵移転の噂を聞きつけた孤屋が、懐しさに引かれて芭蕉庵を訪れ、杉風が秘藏していた芭蕉の真蹟類^{註43}

を見せてもらっているうちに、『野ざらし紀行』の草稿を見つけ出し、杉風に許しを乞うて借り受けることになったのではあるまいか。

孤屋本の奥書は、孤屋の動静や芭蕉没後の芭蕉庵の状態が、以上述べた如くであったとして、はじめてその記述が無理なく解釈されてくるのではなからうか。

孤屋本の筆写年次を元禄十一年に下げたとしても、これが『野ざらし紀行』の第三稿であることには変りない。ただ、跋文が添付されたのは、第三稿成立の後（おそらく芭蕉没後のことであろうが）、杉風か誰かの手によってなされたものであったらという推測を加えるだけである。^{註9}

次に、『野ざらし紀行』の諸本と序文・跋文との関係について考えておく。

初稿本「菊本本」には序文・跋文はなく問題はない。この初稿本は「しら魚」の句を欠いており、帰庵匆忙に執筆されたものと見てよく、素堂が見たものでなかったことも明白である。初稿本の成立を、仮に貞享二年五月、千那宛書簡に示された「辛崎の松」「すみれ」の句の定案を得たころまでであったとして、第二稿泊船本原典・第三稿孤屋本原典の成立は、それ以降ということになる。つまり、貞享二年五月以降にはじめて素堂の序文は作られたのである。そして、第四稿芭蕉自筆絵巻草稿成立の時点で、芭蕉は紀行本文と序文（後序）との釣合を考慮し、全文が賛嘆となっている素堂の序文を不釣合なものだと考え、『紀行』に釣合うべく手を加え、跋文をみずから作製し、それを門人濁子に清書するように依頼した。これが紀行本文と序文・跋文との本来的関係なのではなかったか。

清書が成った後、芭蕉の手元には、紀行本文の第二稿第三稿絵巻草稿、および素堂自筆の序文と芭蕉自筆の跋文が残された。そして、元禄五・六年の頃、許六が芭蕉庵で第二稿泊船本を借用^{註10}し、元禄十一年には孤屋が第三稿を、芭蕉自筆改稿の跋文とともに借り受けた。またおそらく

このころ、曾良が絵巻草稿と素堂自筆の序を杉風より譲り受けた。^{註11}
以上の如くに考えれば、第二稿泊船本・第三稿孤屋本に跋文が結びついてくることも、矛盾なく理解されるのではあるまいか。

五

最後に問題となるのは、序文および跋文の執筆時期である。この問題の焦点は、従来しばしばとりあげられた、跋文冒頭部の「十暑市中に風月をかたり、三霜江上の幽居を訪ふ」の一節である。

ところで、弥吉菅一氏は、孤屋本の成立を貞享三年六月とする立場から、「山素堂跋文執筆の年時は、実に貞享三年六月以前であった」とされ、長文型の序文は『とくどくの句合』の序の署名のしかた「かつしかの隠士素堂」と、宝永七年芭蕉十七回忌集『葛飾』の序文中の「十暑市中に風月をかたり七霜かつしかのかくれ家にとまなふ」という類似した文章の二点から、素堂の序文改稿を宝永七年に接近したころと推定された。^{註12}

孤屋本の筆写年次を元禄十一年とした上で、『とくどくの句合』序の署名のしかたの問題と、『葛飾』序の類似した文章との問題からまず検討していく。弥吉氏は、素堂の署名が山素堂（天和・貞享）↓江上隠士素堂（貞享中葛飾移住以後）↓かつしかの隠士素堂（正徳頃）という移行を示しており、「江上隠士」から「かつしかの隠士」への変化は「芭蕉との交りが深まるにつれて、漢詩文中心から国文的色彩が加味されていったこと」^{註13}によるとされた。ここで、仮名書の署名のある文章をみると、確かに晩年のものに多く、

「嵐雪を悼む辞」（宝永四）「かつしかの隠士素堂書」

「梅の時序（中村七三郎追悼文）」（宝永五）「かつしかの隠居素堂序」

「三画一軸之跋」（年時不明、但し元禄七年以降）「かつしかの散人素堂」

「法竹子の父に手向る辞」(年時不明)「かつしかの隠士素堂拝書」

といった署名をしているが、素堂が「かつしか」と仮名書にした理由は、人間関係の親密なものに限られているようである。晩年のものにも「武陽散人素堂書」(寸の字序・菊の塵跋・千鳥掛序等)といった漢文臭の強い署名は少くないからである。親密さの度合が素堂に「かつしか」と仮名書させたとすれば、貞享年中とはいえ、芭蕉の『野ざらし紀行』に対して、仮名書の署名を用いたことは許されてよいであろう。貞享三年仲秋の瓢の銘「四山」(漢文)の署名に「葛飾隠士素堂書」と記した素堂が、『野ざらし紀行』(和文)に相応な仮名書にしたと考えれば、この期にもありうることだったのではなからうか。

次に、跋文と『葛飾』序の文章との類似についてであるが、弥吉氏はこのことを、

④はせをはをのれをしるの友にして、十暑市中に風月をかたり、三霜江上の幽居を訪ふ。…… (野ざらし紀行跋文)

⑤今はむかしの友はせをの翁十暑市中に風月をかたり七霜かつしかのかくれ家にとまふ…… (葛飾の序文)

のように、④に類似した⑤を「葛飾」の序に草した彼は、④を改める事・必要感にせまられ、

⑥我友はせを老人ふるさとのふるきをたづねむつるでに、行脚の心つきて、その秋江上の庵を出…… (野ざらし紀行序文)

と書き改めたものではなからうか。^{註4}と考えられたが、『葛飾』の序文を草する時点で、二十年以上も前の文章との類似が、なぜ「改める事の必要感にせまられ」ることになるのか、全く疑問である。私は、弥吉氏とは逆の考えをとらざるを得ない。素堂は、跋文が芭蕉の改稿であることを知っていた、いやそのことを知らされていた^{註5}からこそ、芭蕉十七回忌の追悼の文を草するにあたって、この一節を思いだし、「十暑市中に」「七霜かつしかのかくれ家に」と、芭蕉の文章にあやかって、芭蕉の十七回忌を「十」と「七」で文飾

したものであったと想像する。このように解釈するのが、はるかに自然なことなのではあるまいか。

次に、跋文の「十暑」「三霜」について検討する。阿部正美氏は、孤屋本の成立が貞享三年六月であるという弥吉氏の説を認められた上で、跋文の「十暑市中」の一節を検討され、結局、この跋文は貞享二年秋までに成立していたのではないかと推定された。氏の論拠は、『葛飾』序の「かつしかのかくれ家」が素堂自身の隠宅を指すのに対し、跋文の「江上の幽居」は深川の芭蕉庵を意味し、跋文の「いにし秋」を「去年の秋」と解され、「三霜江上の幽居を訪ふ」は、素堂が天和の三年間、「深川の草庵を訪うて芭蕉との交遊を続けたこと」を意味していたのだという点にあった。^{註6}

跋文が、素堂ではなく芭蕉の手になったものだとしても、「はせをはをのれをしるの友にして、十暑市中に風月をかたり、三霜江上の幽居を訪ふ」における、「江上の幽居」を深川の芭蕉庵と解することに変わりはない。この一節は、素堂になりかわった芭蕉が、自己の十三年間の素堂との交遊を、素堂の立場から叙述しているのであって、「幽居を訪ふ」は、あくまで素堂が深川の芭蕉庵を訪うて「芭蕉との交遊を続けたこと」を意味していたと解してよい。

ここで注目されるのが「山口素堂の研究」における荻野清氏の御説である。氏は、素堂の葛飾移居を、貞享二年四月から同四年霜月の間であると推定された上で、「按ふに、『甲子吟行』の素堂序は、紀行直後の執筆ではなく、一二年の歳月が経過した後において書かれたものではなからうか。(中略)素堂が葛飾に移住したのち貞享三四年の頃に筆を執ったのが、即ち『甲子吟行』の序文なのであろう。(中略)「その秋江上の庵を出」とあるが、この「その秋」といった漠然たる書きぶりのうちにも、この序文が紀行直後勿々の執筆でないことを示唆するものがある」と述べ、跋文については、「それには「十暑市中に風月をかたり、三霜江上の幽居を訪ふ」とあって、素堂の葛飾移居を貞享二年夏秋の頃

とすれば、右の跋は、同四年の冬芭蕉が伊賀に赴くべく江戸を出立した頃の執筆といふことになる」とされた。

私の考えも、結論的に荻野氏の説を襲うことになる。すでに述べた如く、『野ざらし紀行』の第二稿の成立が、貞享二年五月以降である時、第二稿、あるいは第三稿を読んだことの明白な素堂の序文の成立は、最大限の幅を考えて、貞享二年夏から貞享四年前半迄のことだったと推定される。荻野氏の説を考慮すれば、貞享三年中ぐらいが最も妥当なところであろう。

素堂の序文成立を貞享三年中とすれば、跋文は当然貞享四年ということになってくる。『野ざらし紀行』が絵巻へと発展していった契機が何であつたか知るよしもないが、貞享四年秋と思われる、素堂の「蓼虫説」に芭蕉が「跋」を添え、英一蝶が絵を描いた一事が思い合わされる。こうしたものとの関連を考えてみれば、芭蕉自筆絵巻の成立は、貞享四年の秋前後であつたと見てよいであろう。「蓼虫説跋」と『野ざらし紀行』跋文の成立が同時期のものであるという推測は、既に検討した両者における四字句を中心とした推敲態度の類似性によつても、裏付けられるのではなからうか。

以上の如くに考えてくれば、荻野氏が述べられた如く、跋文の成立は貞享四年秋から冬にかけて（十月二十五日の旅立ち直前迄）ではなかつたかと推定されるのである。

おわりに

以上が私の『野ざらし紀行』跋文への疑義であるが、最後に、濁子筆『野ざらし紀行』絵巻に添えられた芭蕉の奥書を検討しておく。

此一巻は必記行の式にもあらず、たゞ山橋野店の風景、一念一動をしるすのみ。爰に、中川氏濁子、丹青をして其形容を補しむ。他見可恥もの也。

芭蕉散翁書

たびねして我句をしれや秋の風

この奥書が、奥書執筆時における芭蕉の『野ざらし紀行』についての考えを知る、きわめて重要な意味を持つことは今更いうまでもないが、このことについては別稿を期すとして、今は、この奥書の執筆時期についての検討にとどめておきたい。

この奥書について、筆蹟と印記の検討から貞享末・元禄初頭の頃のものとして推定されたのは、岡田利兵衛氏であつた。^{註4}勿論、私も岡田氏の御説に従うものであるが、以下、いささか私見を加えておくことにする。

すでに述べた如く、私は芭蕉改稿の跋文を持つ『野ざらし紀行』絵巻草稿（この場合は全てが芭蕉自筆のものということになる）の成立を、「笈の小文」の旅立ち直前と推定する。したがって、濁子の清書本成立は、「笈の小文」の旅中、貞享四年十一月から同五年八月の間であり、この芭蕉自筆の奥書は、発句の「秋の風」より考えて、帰庵勿々の頃であつたと思われる。

奥書に付されたこの発句と、貞享三年八月成立の去来の『伊勢紀行』に与えた発句との句調の相違は、ほぼ二年近くの相違を示しているのはあるまいか。『伊勢紀行』跋で、

東にしあはれさひとつ秋の風

と詠んだ芭蕉が、絵巻の奥書では、

たびねして我句をしれや秋の風

と、全く教訓調で詠みくだしているからである。芭蕉に、この教訓的態度（濁子筆の絵巻一巻が誰に与えられたかを差引いたとしても）を齎したものは、「鹿島詣」「笈の小文」の二度におよぶ旅の体験と、それらの旅における創作体験にもとづく、自己の俳諧文芸に対する自信だったのではあるまいか。また、この跋文に見られる『野ざらし紀行』を否定する発言は、この期における芭蕉の紀行についての考え方が、『鹿島詣』『更科紀行』に示された如く、俳文的紀行^{註5}に傾いていたからではなかつたか。こうした芭蕉の紀行についての考え方の変化の窺える点から

も、この奥書執筆の年時を貞享五年秋と考えたいのである。

以上、臆測に臆測を重ねた推論に終始したが、『野ざらし紀行』跋文が、芭蕉の手になるものであったという仮説が認められるとすれば、我々はまことに貴重な芭蕉文献を入手したことになるのであるがいかかなものであろうか、大方の御批判を御願ひする次第である。

註

- 1、『芭蕉俳句の解釈と鑑賞 後篇』昭21・9。
 - 2、弥吉菅一・阿部正美の各氏、『校本芭蕉全集』等。
 - 3、『山口素堂の研究』『俳文学叢説』昭46・4・所収。
 - 4、筆者註。
 - 5、『芭蕉俳句の解釈と鑑賞 後篇』219頁。
 - 6、同右、355頁。
 - 7、序文・跋文の本文引用は、ともに『校本芭蕉全集』によった。以下の芭蕉作品の引用も全て同書によったが、いちいちの註は省略する。
 - 8、引用は『連歌と俳諧』創刊号の翻刻本によった。
 - 9、引用は『未刊連歌俳諧資料』第四輯1の翻刻本によった。
 - 10、引用は、俳書集覧所収『素堂家集』によった。
 - 11、『俳人真蹟全集』第三所収の大橋本の跋文には「鐘期」とある。
 - 12、『野ざらし紀行評釈(一)』『俳句』昭44・3。
 - 13、杜甫の詩句は、尾形氏の「野ざらし紀行評釈(二)」から引用した。
 - 14、素堂にもこれに似た文章がある。『曠野集』員外所載の「麦をわすれ」の句の前書がそれである。
- (前略) 我東四明の鐘に有て、花のこゝろはこれを心とす、よつて佐川田喜六の、よしの山あさなぐといへる哥を突にかんず。又
麦喰し雁と思へどわかれ哉
此句尾陽の野水子の作とて、芭蕉翁の伝へしを、なをざりに聞しに、さいつ比田野へ居をうつして、実に此句を感ず。むかしあまた有ける人の中に、虎の物語せしに、とらに追はれたる人ありて、独色を交じたるよし。誠のおほふべからざる事左のごとし。猿を聞て突に下る三声のなみだといへるも、実の字老杜のこゝろなるをや。猶雁の句をしたひて、
麦をわすれ華におぼれぬ雁ならし

この詞書における、前からの三例はいずれも自分に体験的裏付があつてはじめて文学の実(誠)が感じられるという例である。それらの例からおして、杜甫の詩句における「実」も、杜甫の体験によつた真実の心に違ひないであろうと推測していると解される。この自己の体験に照しあわせることによつて、作品の実を感じとっていくという方法を、素堂が序文の改稿にあたつて持ったとしても、跋の文章とはなりえなかつたであらう。すでに述べた如く、跋文の執筆態度は、鑑賞者の態度からではなく、創作者の側からのみ生まれる創作手法の説明だつたからである。『三日月日記』序における、跋文に類似した文章の引用も、『曠野集』員外のこの引用も、芭蕉の文章であることを知つての借用だつたような気がしてならないのであるが、いかがであらうか。

- 15、『芭蕉俳句の解釈と鑑賞 後篇』165頁。
- 16、同右、278頁。
- 17、引用は、俳書集覧所収『素堂家集』によった。猶、日本俳書大系所収『素堂句集』所載のものにも、同じく「も」がある。
- 18、引用は、日本俳書大系所収『陸奥衛』によった。
- 19、引用は、日本古典文学大系『連歌集』によった。
- 20、引用は、近世文芸資料『長嘯子全集』第一巻によった。
- 21、引用は、『素堂家集』によった。
- 22、引用は、日本俳書大系所収本によった。
- 23、引用は、延宝二年刊『艸山集』によった。
- 24、引用は、古俳書文庫『鉢扣』によつたが、一部俳諧文庫所収の『素堂文集』によつて補つた。
- 25、詳しくは、拙稿「芭蕉俳文における「鼓舞」について」『語文研究』26号、昭43・10・を参照されたい。
- 26、『素堂と老荘—貞享期—』『専修国文』第8号、昭45・9。
- 27、註3に同じ。
- 28、詳しくは、拙稿「芭蕉俳文の構造と文体」『解釈と鑑賞』昭47・9・を参照されたい。
- 29、素堂は、他に「浮雲流水」といった四字句を何度も繰返し用いているが、それらは単なる文飾として用いられているだけで、芭蕉の如き文体的特徴とはなっていない。
- 30、弥吉菅一氏「野晒紀行の「地の文」の成立過程」『大阪学芸大学紀要』昭

29・3。同氏『芭蕉紀行集』1、解説など。

31、山崎喜好氏「許六をめぐる」『芭蕉と門人』昭23・9、弥吉菅一氏「孤屋『野ざらしの紀行』の価値」『国文学』昭27・10・など。

32、岡田利兵衛氏『説芭蕉』昭47・1、図版解説34頁。

33、「野ざらし紀行覚え書」『国語と国文学』昭33・11。

34、引用は、俳諧文庫所収「冬かつら」によった。

35、岡田利兵衛氏「天理図書館蔵煙屋伝来品」『ビブリア』50号、昭47・3・参照。

36、引用は、日本俳書大系所収『杉風句集』によった。猶、後述『桃青伝』では同書を『杉風書留』と呼んでいる。

37、引用は、東京大学附属図書館蔵「あつめぐさ」所収のものによった。

38、「蕉門諸生全伝」には、「ニタツ、ラ」もあったと記す。

39、註32に同じ。

40、元禄十一年刊『俳諧問答』で、「菊の香」所収の「命ニツ中に活たる桜哉翁」について、許六は「是、「命ニツの」と文字あまり也。予芭蕉庵にて借用の『草枕』に、礎に「の」の字入たり。「の」の字入て見れば、夜の明るがごとし。しかし、風国が文章に『のざらしの集』などいへる事あれば、見ざるともいひがたし」と、風国の引用の杜撰さを指摘している。風国は『菊の香』『泊船集』ともに「命ニツ中に活たる」の句形を載せており、他の諸本には全て「の」の字があることから、許六の指摘は正しいと見てよい。また『野ざらし紀行』諸本のうち「活たる」とするのは泊船本のみであるが、このことについての許六の指摘がないことからすれば、許六も同じ泊船本の原典を見ていたということになる。後年許六が、孤屋転写の『野ざらし紀行』に興味を示したのも、それが自分が見たものと異っていたからだと考えられる。

41、『芭蕉翁文台図』（宝暦十二年序）の夢太の序に「翁迂化の後甲子吟行の一軸翁自画賛とともに門人曾良乞請て古郷信濃国上の諏訪なる甥笠井氏某に付属す云々」とある。岡田利兵衛氏『芭蕉の筆蹟』161頁参照。

42、前掲「孤屋『野ざらしの紀行』の価値」。

43、註42に同じ。

44、註42に同じ。たゞし、傍点は筆者。

45、子光編『素堂家集』に、序文があつて跋文がないのは、当時まで（享保六年八月子光自序）、素堂の周辺の人々には、跋文が芭蕉の手になる文章であ

ることが知られていたということを証するのではあるまいか。

46、註33に同じ。

47、『芭蕉の筆蹟』166頁。

48、宮本三郎氏「『笈の小文』への疑問」『文学』昭45・4、5・参照。

付記 論文の性質上、先学に対し礼を失した言辞を弄した部分があったが、お許し頂きたい。

孤屋本の焼付をお送り頂いた弥吉菅一先生、その仲介の労をおとり頂いた大谷篤藏先生、また、潜居本のコピーをお送り頂いた日野龍夫先生に、衷心よりお礼申しあげる。

（高知女子大学国文学研究室）